

特別連載

初歩から学ぼう

中国茶

第1回 お茶の始まり～中国茶から日本茶、紅茶へ



中国料理を引き立てる名パートナーである中国茶。今号からスタートする新連載では、基本的な知識から楽しみ方まで、中国茶の奥深い世界をご紹介します。本誌連載「中国茶の真髄」でおなじみの明山茶業株式会社の張文昕さんと、同じく清水浩義さんにお話を伺いました。



明山茶業株式会社
営業部次長
清水浩義さん



明山茶業株式会社
取締役中国室長
張文昕さん

お茶の起源は中国にあり 始まりは解毒剤として

世界中で親しまれているお茶ですが、そのルーツは中国にあります。お茶の原産地とされているのは、中国雲南省を中心とした西南地域。紀元前2700年代にお茶を発見したという神農の逸話が残っています。

神農は医薬・農業の神とされる皇帝で、紀元前に書かれた思想書『淮南子』、歴史書『史記』などに登場しています。

これらの古文書の記述によると、神農は草木を見ると自分で食べてみて、薬になるものか、毒になるものかを見分けていました。不思議なことに神農の胴体は透明で、毒がある草を食べると内臓が黒くなることから判断できたといわれています。このようにして神農は多くの薬草を発見



草木を食む神農

した一方で、1日に70以上の毒にあたることもあったとか。

そんなある日、神農は毒にあたって木陰で休んでいました。白湯を飲むと水を沸かしているところに、数枚の葉がひらひらと舞い落ちてきました。これを飲んでみると、すばらしい風味だったばかりか、体内の毒が消えたのです。それ以来、神農は毒にあたるとお茶で解毒しながら、薬草を集めていきました。

唐の時代（760年頃）、文人である陸羽が著した最古のお茶の専門書『茶経』には、「茶の飲を為すは、神農氏に発す」とあり、神農が喫茶の始祖であると伝えられています。

日本茶・中国茶・紅茶は 同じお茶の木がルーツ

お茶の木（チャノキ）はツバキ科の常緑樹で、学名をカメリア・シネンシスといいます。中国茶や日本茶、そして紅茶も、このチャノキからできたもの。お茶の品種は日本だけでも「やぶきた」「や「やえみどり」など100種類以上あり、世界中の品種を含めれば数え切れないほどありますが、その品種の元になるチャノキは、中国種とアッサム種の2種です。こ

こから派生して、さまざまな品種が誕生しました。また、中国種とアッサム種を交配した品種（交雑種）も生まれています。

中国種

根元から枝分かれして生える灌木型の品種。2〜3mと背丈が低く、茶葉も小さい。渋みのもととなるカテキンの含有量が少なく、発酵しにくい。

アッサム種

直立して生える喬木型の品種で、10mを超える高さにもなることも。茶葉は大きく、渋み成分となるカテキンを多く含み、発酵しやすいため紅茶に向いている。



チャノキ
(カメリア・シネンシス)

中国から世界へ広がるお茶 その歴史と個性を探る



中国茶

茶樹の品種 主に中国種

代表的な産地 浙江省、福建省、江西省、広東省、江蘇省、雲南省

一般的な製法 お茶によって発酵度が異なり、製法もさまざま。黒茶（プーアル茶）のように、微生物によって発酵させるものもある。緑茶（不発酵茶）は釜で炒ることで発酵を止めるため、香ばしい香りが立つ。

中国茶は、陸路と海路によって世界各国に広まっ
ていきました。

日本に伝わったお茶は日本独自の茶文化へと発達し、ヨーロッパに伝わったお茶は紅茶文化として花開きます。

中国からもたらされたお茶が発展していった歴史をひもとき、中国茶、日本茶、紅茶の特徴についても見てみましょう。

日本茶の歴史

遣唐使の時代に伝わり

鎌倉時代に栽培が各地に広がる

日本に茶がもたらされたのは平安時代、最澄や空海、永忠らの遣唐使が中国からお茶の種子を持ち帰ったことが始まりとされています。平安初期に編纂された「日本後紀」には、815年に「嵯峨天皇にお茶を煎じて献上した」という記事が残っています。この頃は薬として飲まれていたようです。また、僧侶や貴族などの限られた人たちが口にできる、大変貴重なものでした。

鎌倉時代には、臨済宗の開祖である栄西が留学先の宋から茶の種子を持ち帰り、寺院で茶の栽培を始めました。宋西は、お茶の種類や効能、栽培方法、製法などを『喫茶養生記』にまとめ、日本で初めてのお茶の専門書として読み継がれています。この頃のお茶は、乾燥させた茶葉を粉碎して飲む、碾茶（抹茶の原料）に近いものでした。

また、京都高山寺の明恵上人は、宋西から譲り受けた茶の種子を京都の高山寺に植えて、茶を奨励しました。このよう

に寺院を中心として茶の栽培が広がり、各地で栽培されるようになりました。

飲み方や製法が確立し、

日本人の日常的な飲み物に

室町時代になると、茶の文化が武士の間に浸透し、その庇護を受けながら発展していきます。村田珠光により道具の贅沢を排した「佗び茶」が生まれ、その後、千利休が現代まで受け継がれている「茶の湯」の作法を完成させました。

「茶の湯」は、江戸時代に入ると幕府によって重んじられます。1738年には、宇治の永谷宗円が現在の煎茶に通じる製法を發明。「宇治製法」と呼ばれて全国に広がり、日本茶の主流となっていきました。さらに、玉露の製法による高級緑茶も登場。お茶の飲み方や製法が確立したことで、庶民の間でも広まっていきました。

明治時代以降はお茶の生産の機械化が進み、大正〜昭和初期になって日常的にお茶を飲む習





紅茶

茶樹の品種

主にアッサム種 ※中国種との交雑種もあります

代表的な産地

インド、スリランカ、インドネシア、ケニア、中国（中国種）

一般的な製法

茶葉を完全に発酵させて作る。茶葉の水分を40%ほど蒸発させたあと、揉んで形を整える。その後、発酵させることで葉が緑色から褐色になり、紅茶特有の芳香を放ち始める。高温熱風で発酵を止め、乾燥させて仕上げる。



日本茶

茶樹の品種

主に中国種

代表的な産地

静岡県、鹿児島県、三重県、宮崎県、京都府

一般的な製法

まったく発酵させない不発酵茶。摘み取った茶葉を蒸した後、揉んで茶葉の形を整えながら乾燥させる。蒸すことで発酵を止めるのが特徴で、蒸し時間の長さによってお茶の味や香り、水色が決まる。

慣が一般化したといわれています。かつて日本茶は日本人の生活に定着したのです。

紅茶の歴史

最初に伝わったのは緑茶だった?!

ヨーロッパに初めてお茶が伝わったのは大航海時代、17世紀前半のことです。当時、東洋との貿易を独占していたオランダ東インド会社が、中国茶の輸入を始めました。このときの中国茶は緑茶だったといえます。

その後、イギリスの貴族社会で喫茶の習慣が広まり、お茶の需要が高まると、イギリスはオランダと戦争をして勝利を収め、中国から直接輸入するようになりました。このときのお茶は紅茶に似た発酵茶で、茶葉の色から「ブラックティー」と呼ばれます。「ブラックティー」は、イギリスをはじめヨーロッパに多い硬水に合っていたこと



から、やがてヨーロッパでのお茶の主流となり、現在の紅茶のものととなりました。

一方、西ヨーロッパ諸国とは別ルートでお茶が伝わったのがロシアです。中国と、モンゴルやシベリアを経由した陸路による交易を行いました。馬やラクダによる運搬では、日持ちがする茶葉が最適。お茶の輸入量が増え、独自の喫茶文化が広がることになりました。

アッサム種の発見によりイギリスから世界各国へ

1823年、イギリスの冒険家ロバート・ブルースが、インドのアッサム地方に茶樹（アッサム種）が自生しているのを発見。これは後に中国の茶樹（中国種）とは別種であることが確認されます。以来、イギリスの統治下にあったインドやスリランカ、バングラデシュなどに大規模な茶園がつけられ、お茶の栽培が盛んに行われました。紅茶の大量生産が可能になったことで、イギリスの紅茶文化はますます発展し、紅茶は世界各国へと広がっていききました。そして世界中で、各国の風土や食文化に合った喫茶習慣が根づいていったのです。